

泣くために、  
愛するために。

## 映画『うまれる』がうまれた理由

自分は愛されているんだろうか……。

自分はほんとうにこの父親と母親の子どもなんだろうか……。

物心ついた時から、僕はそう思っていました。

僕には四歳年下の弟がいるのですが、右の目が半分開かない状態でうまれてきたことから、ずっと入院と手術を繰り返していました。当然のことながら、弟に手間がかかったために、精神的にも、物理的にも、両親が僕の側<sup>そば</sup>にいてくれる時間は少なかったんです。

母親は弟のことで精いっぱい。父親は仕事で精いっぱい。だから、僕は「親の愛情」というものを、何だかよく知らずに育った気がしています。

そんな状態が続くうちに、そもそも自分の存在価値がよくわからなくなってしまうしました。

自分はなぜうまれてきたのか、何のために生きているのか――。

# うまれる

[www.umareru.jp](http://www.umareru.jp)



僕はただ、両親と仲直りがしたくて、この映画を作ったのかもしれない。

監督 豪田トモ

結婚もしたくないし、子どもも欲しくない

両親は弟の面倒はよく見ていましたが、基本的に不仲でした。おそらく、弟がいなかったら、もう別れていたんじゃないかな。

両親は仲が悪い。自分に愛情を注いでくれない。で、僕も反発する。口を開けば喧嘩ばかり。思春期の僕の心はズタズタでした。お父さんとお母さんの姿を見ていて、結婚っていいものだなって思えなかったし、だから子どもが欲しいと思ったこともありませんでした。「家族」というものが、よく分からなかったんです。

知らず知らず両親に対して否定的な感情を抱くようになり、反抗期も長引きました。いや、それはつい最近まで続いていたような気がします。

三十歳前後になると、まわりでは、「そろそろ親孝行」なんていつている人たちがいたんですが、僕には「親孝行」という概念が理解できませんでした。どうして何もしてくれない、自分を愛してくれない親に、返さなきゃいけないの？って思ってたんです。

いまここで父親が死んだら、母親が死んだら、自分は泣けるんだろうか？と真剣

に考えたことが何度もあります。もうすぐ三十歳になろうとしているのに、周りと違って親に感謝できない自分が恥ずかしかった。

なぜ僕はこんな人間になってしまったんだろう……。

## 結婚、夢の実現、そして離婚

自分と両親との関係は、自分なりに消化しなければならない。そう思ったきっかけは、離婚でした。

僕は二十九歳の時、十年間の交際を経て結婚をしました。当時、僕はサラリーマンだったのですが、秘かな夢は映画監督になること。

「二生、ロマンの持てる仕事はないものか」

思い悩んでいた十九歳の浪人生時代に見た映画が、トム・クルーズ主演の『7月4日に生まれて』でした。半身不随で車椅子生活をする役柄を演じるため、トム・クルーズは約一年間、車椅子で生活したという記事を読んだ時に、「そんな大変なことが出来る映画って何だろう？もしかしたら僕の一生を賭けられる何かがあるの

かもしれない」と思い、「映画監督になる」と決意したのでした。

しかし、どうすれば映画監督になれるのかが分からないまま、大学では法律を学び、卒業後は「映画監督なんて夢みたいな話だ。現実を見なければ」と、コンピュータ関連の会社に就職しました。

けれど、映画を撮るといふ夢をどうしてもあきらめきれず、六年間のサラリーマン生活の末、カナダ・バンクーバーに単身、映画留学したのです。

当時、僕は新婚半年だったのですが、とにかく、夢を実現したかった。約四年間、夢に向かって猛烈に邁進まいしんしました。僕はバンクーバー、彼女は東京。数カ月一度会ったときには「早く帰って来て欲しい」と言われたものの「いま帰っても留学した意味がない。もっと成長したい」とわがままを通し続けました。

そのうち、自分の作った作品が映画祭に入选し、スポンサーが現れ、少しずつスキルアップしていくのを実感していました。「彼女のためにも早く腕を磨かなければ」という思いも、僕を後押ししてくれたんだと思います。

そして、満を持して日本に戻ったものの……彼女の心はすでに遠く離れていたのです。当然ですよ……。十四年間連れ添った女性と別れることは、信じがたいく

らいつらい経験でした。

なぜこうなってしまったのか……。

## 親子の関係は無意識のうちに連鎖する

当然、僕が夢に邁進しすぎたことが主な原因でしたが、そもそも、自分に「家族」という概念に対する意識が、極端に欠けていたことに気がつきました。小さい頃から両親に反発してきたことで、「夫であること」「家族を持つこと」「父になること」に対して、自分の中にまったくイメージを持っていなかったうえに、自分が反感を抱いていた父親と同じように、無意識のうちに「家庭よりも仕事」の男になっていたのです。

もしかしたら、親子の関係は無意識のうちに連鎖するんじゃないだろうか。いつかはまた結婚をし、子どももできるのかもしれない。でも、親のモデルとなるのは自分の両親しかないから、僕もまた、親の愛情を実感できない子どもを無意識のうちに育ててしまうんじゃないか。

そう考えると怖くなり、自分と両親との関係を何とかしたいと思うようになったのです。ただ、僕からアクションを起こそうなんて考えたこともなくて、そもそも関係を悪くしたのは両親なのだから、「寂しい思いをさせて、悪かったね」と僕に歩み寄ってくるべきなんじゃないか、そう思っていました。

それなのに、両親はいつこうにそんなそぶりは見せてくれない。それどころか、「お前に映画を作る才能なんかあるわけがない」と頭ごなしにいわれ続けていたことで、さらに両親との距離は遠く離れていきました。

こんな状態でどうすれば親との関係を修復できるんだろう、何とかしなくちゃ、と思えば思うほど、何をどうすればいいのかわからず、途方にくれる日々でした。

子どもが親を選んでうまれてくる？

そんなある日、日ごろからお世話になっている方に頼まれて、あるセミナーの撮影することになりました。聞けば、池川明先生という産婦人科医師の講演があるとのこと。

おそらく大多数の独身男がそうであるように、当時の僕は、妊娠・出産になんてまったく興味がありませんでした。居酒屋で出産について話することなんてないし、話を聞いてみたい産婦人科の先生なんて誰もいません。朝早くて遠いし、「面倒くさいなあ」というのが正直なところだったんですが、なんか虫の知らせを感じて、行ってみたんです。そうしたら、池川明先生は何だか怪しい話をしていました（笑）。

「胎内記憶を持っている子どもは、三歳ぐらいだと三〇パーセントもいる」

胎内記憶——それは、僕には初めて耳にする言葉でした。何だ、それ？ と思っていると、先生はさらにこういうのです。

「赤ちゃんたちは、雲の上でお父さんとお母さんを選んでうまれてくる」

池川先生によれば、子どもたちは雲の上から親たちを見ていて、「この人はやさしそうだから」「お母さんを助けてあげたいから」といったような理由で、お母さんのお腹の中に飛び込んでくるのだといいます。

何だ、そりゃ!?

「自分は好きでうまれてきたんじゃない」し、「子どもは親を選べない」と、ずっ

とっていました。でも、池川先生の話は、その真逆——子どもが親を選ぶ——の発想です。あまりにも非科学的でファンタジーな話。でも、当時の僕は、なんだか不思議と理解できたんです。そして何ともしやうのない大きな感動で、しばらく手の震えが止まりませんでした。

もしかしたら、親との関係を説明してくれる何かを、僕はずっと求めてきたのかもしれません。

胎内記憶については当然、科学的な根拠はないし、ほんとうかわからないけれど、もし、僕が親を選んで生まれたのだとしたら、いまのごくしゃくした親子関係は、自分が引き起こしているんじゃないのか。悪いのは、親ではなく自分なんじゃないか……。

「愛されていない」なんて思ってきたけど、僕は親を助けたことはあるのだろうか。僕から親に愛情を注いだことはあるのだろうか……。いや、僕は三十年以上、何もしてきていない……。

そう考えると、色々なことが理解できるようになっていったんです。

ああ、そうか、弟が大変だったから、僕の相手ができなくても仕方なかったよな。

ああ、お母さん、弟のことは自分のせいだって思っていたから、つらかっただろうな。

ああ、もしかしたら僕のことをほんとうは愛してくれていたかもしれない。でも、僕がそれに気づかなかっただけかもしれない。

両親のことが少し理解できたような気がして、否定的な感情が少しずつ消えていくのを感じました。そして、うまれて初めて、親孝行できる人間になりたいって思えたんです。両親に「産んでくれてありがとう」って感じる事ができたんです。

胎内記憶という、本当か嘘か分からないような、真実かどうかよく分からないお話に、僕は心から癒されて、勇気づけられたのです。

うまれてくること、そして生きるとは、まさに奇跡の連続

「うまれる」ことを映画にしたい！という気持ちの底から湧いてきました。いのちという原点に向き合うことで、僕自身、両親との関係を築き直せるかもしれない……。

ただ、突然の思いつきですから、製作資金のアテもありません。どんな映画にしようかという具体的なビジョンもない……。

あれから三年あまり。約一年間のリサーチの後、幸運にも映画の資金が集まり、製作開始から二年……。妊娠・出産のことを知れば知るほど、そして、実際に出産の現場に立ち合わせていただくたびに、その奥深さと神秘に、僕は圧倒されています。

胎内記憶というものに出会ったことは、「生まれる」ことのほんの一部にすぎなかったのです。生まれてくること、そして生きることとは、まさに奇跡の連続でした。いのちってすごい、奇跡的に生まれたあなたは素晴らしいんだ！ということを、一人でも多くの人に伝えたい――。

こんな、僕のいわば個人的な思いに賛同してくださった多くの方たちに支えられ、映画『生まれる』は製作にこぎつけることができました。

僕のように、親に対して否定的な感情を抱いている人、仲違いをしている親子、ちよつとぎくしゃくしている夫婦など、さまざまな理由でむずかしい関係に置かれている人はいるでしょう。あるいは、生きること疑問を感じていたり、子どもを

産むことを躊躇ちゆうちゆうしていたり、子育てを息苦しく感じている人もいるかもしれません。

でも、僕が体験したようなことを、映像で表現して、それを見て心を動かしてもらえる人がいたら……。

自分が親を選んだかもしれない、生まれてくるって凄いことなんだ、僕らはここにこうして息を吸っていることがどれだけ奇跡的なことなのか……。こんなことを実感できたら、僕みたいに親子関係を改善できる人がいるかもしれないし、生きる目的をなくした人も、もう一度明日から頑張ろうって思えるかもしれないって思っただけです。

一つの映画で何ができるわけでもないし正直、思っています。現実的には一つの映画で社会が変わられるとも思いません。でも、一人くらい、たった一人だけだったら、大分県の誰か、愛知県の誰か、百万人は無理かもしれないけど、北海道の誰か一人だけだったら、この映画を作ること役立てるかもしれないって思っただけです。

そんなことができれば、映画を作るのはすごい時間とエネルギーとお金がかかりますけれど、それはすごく価値があることなんじゃないかって思えたんです。

## いのちの誕生をめぐる四組の家族の物語

『うまれる』には、胎内記憶にかぎらず、妊娠・出産をめぐるさまざまなドラマがつまっています。

両親の不仲、虐待の経験から親になることに戸惑う夫婦、出産予定日に我が子を失った夫婦、子を望んだものの授からない人生を受け入れた夫婦、完治しない障害を持つ子を育てる夫婦……。

出産そのものの素晴らしさだけでなく、そこに宿るさまざまな人々の思い、パートナーシップ、男性の役割、親子の関係なども描かせていただいたつもりです。

この映画が、私たちがうまれてきた意味や家族のあり方、そして「生きる」ことを考えるきっかけになればとしたら、僕はほんとうにうれしいです。

製作には多くの一般の方々にご協力いただきました。編集作業のために約百五十時間分の映像の音声を書字に起こす作業は、約八十人のボランティアさんに行っていたきました。出演者の多くは、公式ホームページからご応募くださった約二百組のご家族のなかから四十組以上を取材し、十件の出産に立ち会わせていただきました。

した。

カメラのレンズ越しに見てきた家族の表情は、笑顔と幸せに満ちていて、いろいろな過去や葛藤<sup>かつとう</sup>はあるけれど、やっぱり、どの親も一人残らず子どもを愛しているんだなあと実感しました。

先日、そんな顔を部屋の中で見つけました。

久しぶりに見たアルバム。

僕が小さかったころの写真に映っているお父さんとお母さんの表情は、僕がレンズ越しに見てきたご家族と同じ顔をしていました。

ああ、僕はこの両親が良かったから、この世に降りてきたんだな。僕も愛されてうまれてきたんだな……。いままで親の愛情が分からずに反抗し続けてきた、自分の振る舞いを思い起こし、両親に対して「産んでくれてありがとう」という思いで、涙を抑えることができませんでした。

その後、両親との関係は劇的に良くなって、いまではたまに電話をしたり、一緒に食事にでかけたりしています。こんなこと、数年前にはとても考えられませんでした。

「あの時はごめんね」なんてことはいいませんが、親と接するたびに、「今からでも息子と良い関係を築きたい」と努力している姿が見られて、僕は感動します。

親子はいつまでたっても、親子。

三十数年かかりましたけど、ほんとうの意味で、家族になったのかなあと思えるようになりました。

## 「わが子」が誕生！

もし自分に子どもがうまれたら、心から愛して育てられる。そんな自信がようやく僕の中に生まれてきたころ……なんと！僕にも赤ちゃんができたんです！

といっても、もちろん僕が妊娠したわけではなく（笑）、『うまれる』のプロデューサーである牛山朋子と僕の間に、新しいいのちを授かったのです。

仕事だけでなく、プライベートでもパートナーだった牛山とは、結婚というかたちはとっていませんでしたが、「産約」さんやくをしていました。「産約」というのは僕が勝手につくった言葉なのですが（笑）、「ともに子どもを産み、育てる約束」のことです。

まさかまさか、自分が子どもを持つようになるとは思っていなかったけれど、いまや父親になる心の準備は万端！

「待ってました！」と、雲の上から降りてきてくれたのかな。

映画を作る前は、愛されること・愛することをよく知らない自分に、子供なんて育てられない、と思っていましたが、今ではそんなときもあったな……という感じます。両親も初めての孫の誕生を、楽しみにしてくれているようです。

出産予定日は、なんと『うまれる』の公開とほぼ同時期!!当然、立ち会います!!映画づくりを通して、両親との絆を確かめることができ、そして新たな家族が生まれようとしている……。僕にとって『うまれる』はただの映画ではありません。家族をつなげてくれた、大切な「わが子」です。

この映画が、僕だけでなく、見てくださった方のご家族も結びつけられるような役目を果たすことができれば……。そう願っています。

そして、ここまで育ててくれたお父さんとお母さんには特大に感謝しています。僕を産んでくれてほんとうにありがとう！

これまでつらい思いをさせてしまったけれど、お父さんとお母さんは僕にとって

最高の親です。これからガンガンと親孝行していきますので、いつまでも元気दैてくさい。

それから、これからうまれてくるチビさん、つながってくれてありがとうございます。

たった二ミリの米粒ほどの君に初めて会ったときの感動は忘れられせん。まだ君はロールケーキくらいの大きさだけれど、会える日を楽しみに待っています。じっくりと育って、このすばらしい世界へ飛び出してきてください。

二〇一〇年九月

豪田トモ

## 映画『うまれる』のご案内

映画『うまれる』は、妊娠・出産・育児を通じて、私たちがうまれてきた意味や家族のあり方、そして“生きる”ことを考える、ドキュメンタリー映画です。

「命は尊い」「家族は大切だ」頭で分かってはいても、心で感じる機会は、どのくらいあるものでしょうか？

自分が親を選んだのかもしれない、うまれてくるってすごいことなんだ、僕らがここでこうして息を吸っていることが、どれだけ奇跡的なことなのか。

こんなことを実感できたら、僕みたいに親子関係を改善できる人がいるかもしれないし、生きる目的が分からなくなった人も、もう一度明日から頑張ろうって思えるかもしれない。

映画『うまれる』は、見ていただいた方々の全細胞の隅々にまで、いのちのすごさが染みわたる、そんな映画にしたいと思い、毎日、魂を込めてつくってきました。ぜひ、ご覧ください。

□ナレーション つるの剛士

□企画・監督・撮影 豪田トモ

□書籍『うまれる〜かけがえないあなたへ』（PHP研究所）

『えらんでうまれてきたよ』（二見書房）も絶賛発売中!!

パパにもできるぞ、  
母乳育児。



## ピジョン 母乳実感<sup>®</sup>

もっとも多くの病院・産院で使われています

プラスチック製 耐熱ガラス製  
160ml 1,575円(本体価格 1,500円) 160ml 1,680円(本体価格 1,600円)  
240ml 1,680円(本体価格 1,600円) 240ml 1,785円(本体価格 1,700円)

わが家は母乳育児。でも、ママのおっぱいが傷ついて痛かったり、体調が悪かったりして、直接おっぱいをあげられないことも。そんな時は、僕がおっぱいをあげる絶好のチャンス。哺乳びんで、さく乳しておいた母乳を飲ませてあげます。

新しい「母乳実感」は、ママのおっぱいみたいなお口の動きができるから、うちの子はいつものように違和感なく、スムーズに飲めるみたい。

さらに、成長段階に合わせて乳首が4タイプあるから、赤ちゃんがどの月齢になっても本来の哺乳ができるそうです。おっぱいをあげる幸せな時間、わが家では夫婦ふたりで楽しみながら続けています。



赤ちゃんの心身を健やかに育てるために、理想的な栄養食といわれる母乳をできる限り与えましょう。この広告は何らかの理由で哺乳びんを必要とされるお母さまへ、正しい哺乳びんの使い方をお知らせするものです。哺乳についての詳しい情報は、ピジョンの妊婦・育児応援サイトをご覧ください。

哺乳びんで授乳する時も母乳で授乳する時のようなスキンシップが大切です。pigeon.info



赤ちゃんのことなら まかせなサイト  
http://pigeon.info/bonyu/



母乳育児の情報はこちら

あなたの街で映画『うまれる』を上映しませんか？

産後鬱や育児ノイローゼ、虐待、そして自殺やひきこもりの増加など、子どもを育てにくい、生きにくい現代だからこそ、多くの方々にご覧いただきたいと願っておりますが、ドキュメンタリー映画はなかなか多くの映画館で上映されにくいのが現状です。

そこで、地域の皆さまに「自主上映」という形で映画『うまれる』の上映をしていただけないかと思っております。

「上映会なんてやったことない！」という方でも「想い」があれば大丈夫です。皆でワイワイガヤガヤ、楽しく上映会を開催していただけると大変嬉しく思います。

命、家族、自分自身…大切な事を「心で感じる」機会があれば、現在の悲しい事件や親子のいさかいなども少なくなる、かもしれません。

映画『うまれる』の上映会がそのきっかけになることを、そして、そのきっかけを皆さまにお作りいただける事を切に願っております。

□お申込＆詳細はこちらのページまで！

<http://www.umareru.jp/everycinema-2.html>